

コロナウイルスとまちのムラ社会

東京大学工学部都市工学科都市計画コース4年

塩崎光

1. 序章

新型コロナウイルスが蔓延する2020年において、悩ましくまた興味深い現象が起きていた。他県から来た乗用車への攻撃、「県外ナンバー狩り」だ。当初はコロナウイルスの感染拡大を防ぐために県を跨いだ移動の自粛が要請されていたことに由来した「自粛警察」の一部だったが、要請が解除され、またGoToキャンペーンが始まり観光業の繁忙期においても、他県ナンバー狩りは依然として報道されていた。

同じような県を跨いだ移動に関する話題として、地方部で感染が判明した場合、身元情報がすぐに拡散されてしまうという現象がある。特に感染者数が少ない県ほどネット上で個人情報が詳細に広まり感染者を誹謗中傷するコメントが集まる。その結果、旅行で金沢を訪れた大学生が旅先で感染・入院してしまい、地元住民からの暴力を恐れて退院したがらない、という事例が起きた。また自分や家族に集まる批判を予期して、都会に下宿をしている若者が実家に帰ることができない、気軽に地方に旅行ができない、という状態にもなっていた。

どちらも自粛期間の一過性の状態と見られていた。しかしこれは長期的な問題となり、「他県からの人を排除する」という意識が人々に植え付けられてしまったのかもしれない。しかしこの意識は全く目新しいものではない。個人主義的な近代社会の形成以前、「ムラ社会」を通じて日本人の中にあつたものなのだ。

一方で人々の中に再発見された意識の中には、好意的なものも存在する。在宅ワークや外出の自粛要請によって活動範囲が自宅周辺の一定範囲内に制限されることによって、自分のまちの良さを見直す意識を持つようになっているのである。散歩する時間が増加したり、徒歩圏内の飲食店を初めて訪れたりすることで、自分のまちにどんな施設が存在するか、どんな魅力的な環境が存在するか、どんなところが良いのかを認識し考えるようになった人は少なくない。

しかし物的な環境を充実させるだけでは理想のまちを実現することはできない。ムラ社会の精神を持つ日本人が理想のまちに求めるものは何だろうか。

本エッセイでは、まず前半部において、ムラ社会の概念をコロナ渦の日本にあてはめることで、上に挙げた特異な現象を説明することを試みる。後半部においては、ムラ社会の解釈を変更することで人々がもつめるまちが実現できるかを議論する。

2. ムラ社会のこれまで

2-1. before コロナのムラ社会

かつての日本の農村では自然に囲まれた孤立した場所にあり、移動手段に乏しく輸送が発達していなかったため、限られた資源を活用して生活を成り立たせて行く必要があった。そのため年長者や土地を保持している有力者を中心とした序列構造が形成され、その秩序の中で資源の配分や共同的な活動が行われた。これをムラ社会と呼ぶ。ムラは閉鎖的な環境の中で自然と共生し秩序を維持することで機能しており、その活動には対面的な交流が不可欠だった。

この秩序を維持するためにムラ社会が行ったのが、排外的な態度とムラ八分による内政だった。ムラは外部の人間の流入を基本的には好ましく思わず、また公的な自治体の介入を拒否する傾向があった。また秩序を乱す内部の犯罪に対しては、儀礼に参加させない、分配を与えないなど、共同体の成員として本来有している権利と義務を奪った。このように内外での排除がムラ社会の運営において包含されていた。

その後都市化が進むにつれて移動能力が増大し流通や社会サービスも充実によって、各人はムラ社会に依存せずとも生活が成り立つようになった。その結果ムラ社会のシステムは解体され個人主義が発達し、「近所の人の顔すら分からない」という状態が生まれた。また地理的に孤立した山村集落では、社会の中心-周辺構造において周辺に位置づけられ近代文明から取り残されていった。このようにムラ社会は大まかに都市化と周辺化の2つの方向に進んだ。

ここで重要なのが、その周辺化したムラ社会の一部では更に自律性を高めていったことだ。物理的に孤立しているため商品経済から独立して、互酬と相互扶助によって自給経済を成立させていた。その場合、秩序の維持と対面的相互作用は依然として必要だった。このようなムラ社会は従来のものからスケールを拡大させる形で地方都市に存在している。

またムラ社会的な共同体意識は日本の企業や集団の中で生き続けている。日本企業の人事制度における終身雇用と年功序列という2つの基本指針は、ムラ社会における閉鎖性・序列構造を再現している。また狭いオフィスでお互いを監視し、風紀を乱す新入りにはイジメという制裁を加える。ムラ社会の意識は集団活動を通じて継承されているのだ。

2-2. with コロナのムラ社会

では現在のコロナ渦で何が起きたのだろうか。「1 はじめに」で挙げた2つの現象を検討する。他県ナンバーに対する暴力は自粛警察の一部であるが、この自粛警察は秩序を維持しようとする意識に由来するのだ。全員が自由に移動した場合コロナの感染が拡大してしまうためそれを抑

止するというだけでなく、各人が好き勝手な行動を取ることに伴う秩序の乱れを抑制しようとする動きなのだ。

また自分の県への流入に嫌悪感を覚えるのは共同体への外来者の拒否と一致する。コロナ渦においてかつてのように移動力が小さい状態になり「自分のムラ」が意識される。それは県を跨ぐ移動の禁止によって都道府県として認識され、県の越境に対して敏感になる。自分のムラのテリトリーへの侵入は車のナンバーによって可視化され、否定的な感情と行動を呼び起こす。このように他県ナンバー狩りはムラ社会の秩序維持のための意識に由来するものであると言える。

もう一つの現象、帰省への恐怖は村八分と関係する。かつては対面的なコミュニケーションの多さが、ムラ社会内の情報伝達の速さをもたらしていた。今はネット、特に SNS が代替し情報のスピードを早めている。コロナに感染した場合それは瞬時に拡散され、現在のムラ、都道府県単位で認識される。乱れをもたらす感染者に与えられるのはムラ八分による処罰で、現実世界においてはシカトや噂で広まる陰口、ネット上では明確な誹謗中傷が行われる。この制裁に対する潜在的な恐怖が帰省しないように若者を留まらせているだろう。

現代日本において依然として残るムラ社会は、コロナ渦において都道府県を単位として顕在化し、部外者に対する制裁においてはカーナンバーや SNS といった現代化の過程で得た要素が役割を持っている。ムラ社会の精神のうち、ムラの秩序を守るという部分だけが表面化したのだ。

ではこの再確認された日本人のムラ社会の精神は悪いものなのだろうか？制裁が現代的に進化したように、人々を結びつける触媒として現代的に進化することはできないだろうか？

4. 新しいムラ社会

4-1. 理想のまちに人々が求めているもの

コロナの感染拡大防止に社会が対応することで変化が加速し、外出を極力控えても日常生活を十分に送ることは可能になっている。この一年間だけで、オンライン会議やリモート授業の一般化や、ウーバーイーツに代表される食に関するデリバリーサービスの充実が起きており、非移動化に対する社会の変化はコロナウイルスの収束に従って速度を落としながらも持続するだろう。自宅だけでの生活に不便を感じることはほとんど無くなるに違いない。

ここでマズローの欲求階層説を取り上げる。これは人の行動原理を説明するために、欲求を五段階に分けたもので、人間は低次の欲求をまず満たそうとして、低次の欲求が充足すれば高次のものを求めるようになるとする。近代社会の成立以後は、最低限の資本を有していれば一次・二次段階である生理欲求・安全欲求は満たすことができた。さらに三次段階である社会的欲求や承

認欲求は、主に企業に属すること、そして企業で働き給与と社会的地位を得ることで満たされていた。またこれらの安定した状態だけでなく、他者とのコミュニケーションも承認欲求を充足させるために必要だった。

新型コロナウイルスの感染拡大によって、まずは二次段階の安全欲求が危機に晒された。その後第一波が収束に向かう中で、多くの人の中で社会的欲求までは満たされていった。しかし、ライフスタイルが変化し、対面のコミュニケーションが減少する中で社会的欲求の一部や承認欲求を叶えることは難しくなっている。

従来まちにおける欲求は安全欲求までで、より高次の欲求は生活圏の外に求めていた。しかし生活圏に存在する時間が増えれば、**まちに対する役割の拡大**も期待するようになるのではないだろうか。そのときこれらの欲求をまちは如何に叶えることができるだろうか。

4-2. after コロナのムラ社会

では「after コロナに向けてまちはどのように変化すべきか」について、二つのキーワードを挙げながらまちに対する提案を行う。

2章のムラ社会の歴史についての論述を振り返る。かつてのムラでは、各人・各家族が単独で生活することは困難で、共同体のために相互扶助的案貢献を行うことが求められた。逆に、階層構造に組み込まれ秩序を守った者には、全員にムラという小さな社会のために活躍する機会が与えられていたと言い換えられる。ムラ社会の精神の中には、「ムラの秩序を守る」だけでなく、自分のムラの運営のために貢献したい、という精神が含まれているのである。現在でも、かつてのムラ社会を格式化したもの、町会や消防団、青年団などが大きく規模を縮小しながらも組織としては存続している。

そこでまちを「**舞台化**」することを提案する。かつてのムラ社会と同様に、まちは人々が共同体のために活躍する場となり、また活躍によって、企業やオンラインで繋がった他者とは別個に、対面的な承認欲求を得られる場所となるのである。

また「**選択可能性**」を持たせることも重要である。山や大河川に囲まれていた頃のムラとは異なり、現在大半のまちは地理的に連続しており、行政区分によって町名が与えられているに過ぎない。自分が活躍する舞台は選択することができ、またまちは人々が担う役割を多様に用意しておく必要がある。

この提案に沿った具体的な事例として「CODE for AIZU」という団体の取り組みがあげられる。この団体では福島県の会津地域の住民を中心に地域課題を解決するためのアプリケーション

の開発が行われている。またイベント開催や広報活動など対面的な交流やエンジニア以外の人が活躍する機会も多く用意されており、また会津地域外の住民も十分に参加可能である。

コロナ渦によって人々が回帰したムラは、お互いが支え合わないと生きられない環境ではない。しかし、自分の内的欲求を満たす**選択的な舞台**として利用することは可能なのだ。ムラが「新しいまち」にアップデートし、人々のムラ社会の精神も更新されたとき、ムラの外敵という概念も無くなるはずである。

5. まとめ

近代以前のムラ社会が担っていた機能の大半は、金銭を媒介とする契約関係に代替され、日本人は孤立化し、まちは単に「人がたくさん住んでいる場所」と見られてきた。しかし、コロナ渦で起きた奇妙な現象を通じてムラ社会の精神自体は現在も存続していることが確認された。本エッセイではさらに欲求階層説をもとに理想のまちに人々が求めるものを考察し、まちに対してムラ社会の精神を積極的な形で利用する方途を示した。

自分のまちに課題と感じている人や具体的に何かやりたいことがある人は多くない。しかし、役割が用意されていれば、まちのために貢献したいと考える人は少なくないはずだ。ネガティブに論じられるムラ社会の精神は、日本人が誇りに思うアイデンティティになる可能性を秘めている。

6. 参考文献

- [1] 内山節「共同体の基礎理論」、一般社団法人農産漁村文化協会, 2015.
- [2] 小松和彦「悪霊論」、青土社, 1989.
- [3] 安村克己：ある山村におけるムラ社会の実態(前半), 追手門学院大学地域創造学部紀要, vol1, 133-178, 2016.
- [4] 安村克己：ある山村におけるムラ社会の実態(後半), 追手門学院大学地域創造学部紀要, vol2, 121-143, 2017.
- [5] 上原秀明：農村社会の空間構造とその変容に関する一考察, 人文地理, Vol34, 503-530, 1982.
- [6] 栗原真行, 青木俊明：社会資本政策に対する住民の意識構造, 都市計画論文集, Vol36, 907-912, 2001.
- [7] 今尚之, 佐藤馨一, 五十嵐日出夫：都市機能の重層段階的発展構造に関する研究, 土木史研究, Vol12, 325-332, 1992.